

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：34444

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K10965

研究課題名（和文）日本で働くベトナム人看護師、介護福祉士、その候補生に対する有効な認知症教育の検討

研究課題名（英文）Consideration of effective dementia education for Vietnamese nurses, caregivers, and their trainees working in Japan.

研究代表者

三浦 藍 (MIURA, Ai)

四條畷学園大学・看護学部・准教授

研究者番号：10438252

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本で働くベトナム人看護師、介護福祉士、その候補生に対する有効な認知症教育を検討するために、ベトナム社会主義共和国ホーチミン市のPham Ngoc Tach University of medicineの研究者と協働し、日本での面接調査を実施した。その結果、多くのベトナム人看護師ならびに介護士が机上の学習内容と実際の認知症高齢者のギャップに戸惑い不安を感じていることが明らかとなった。職場のサポートや支援する高齢者とのポジティブな関わりが不安を軽減すると考えられた。さらに研究結果を活用して、ベトナム現地の学生(180名)を対象に医学、看護、倫理の専門家による講義を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の医療介護分野においても外国人労働者は増加傾向にあり、その結果、様々なコンフリクトが生じている。本研究では日本で働くベトナム人看護師・介護士が、認知症高齢者との関わりにおいて、机上の学習内容と実際に乖離があることを明らかにした。その背景には、日本の認知症の重症化があり、協働するスタッフのサポートや認知症高齢者とのポジティブな関わりが、その戸惑いや不安を軽減することが示唆された。また、その内容を踏まえてベトナムにて認知症に関する特別講義を実施した。以上から、本研究は日本で働く外国人材への教育支援に有効な示唆を与えただけでなく、ベトナム現地における認知症看護教育へも先進的な貢献を果たしたと考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, researchers collaborated with Pham Ngoc Tach University of Medicine in Ho Chi Minh City, Socialist Republic of Vietnam, to conduct interviews in Japan, aiming to explore effective dementia education for Vietnamese nurses, caregivers, and their trainees working in Japan.

As a result, it became evident that many Vietnamese nurses and caregivers feel perplexed and anxious due to discrepancies between theoretical learning and the realities of caring for elderly dementia patients. It was considered that workplace support and positive interactions with elderly individuals could alleviate this anxiety. Furthermore, utilizing the research findings, lectures conducted by medical, nursing, and ethical experts were implemented for 180 local students in Vietnam.

研究分野：精神看護学

キーワード：外国人看護師 外国人介護士 ベトナム 認知症 看護 介護 認識 外国人

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

2014年以降、日本では二国間連携協定(以下、EPAとする)に基づいて、ベトナムから看護師、介護福祉士の受け入れを始めている。さらに2017年からは技能実習制度に「介護」の分野が追加され、2023年5月現在、ベトナムからは累計で看護師候補生239名、介護福祉士候補生1457名が来日し、今後も増加する予定である。

しかし、既に日本で働く外国人看護師、介護福祉士(以下、介護士とする)、およびその候補生からは、認知症をはじめとする高齢者の精神疾患の認識やその対応の難しさを訴えがあり、受け入れ側の病院や教育機関においても認知症を含む高齢者の疾患や理解に関する教育が難しいことが問題となっている(Nugraha et al., 2016)(kawaguchi et al., 2012)。

この背景には、ベトナム社会が若年層の多い社会であることがあげられる。2021年のベトナムの平均年齢は31歳であり、15~59歳が全体に占める割合は65%、中でも25~29歳が最も多い。また、平均寿命は2015年時点で男性71.3歳、女性80.7歳である(JETRO,2021)。医療水準は改善されつつあるとはいえ、先進国と比較すると感染症の占める割合が大きく、1人当たりの医療費支出額は年間117米ドルと高いとはいえない。また、2019年の人口1万人あたりの医療従事者数は、医師8人、看護師14人であり、アジアパシフィック地域の水準(医師14人、看護師30人)と比較すると、特に看護師不足が深刻である(JETRO,2021)。

一方で、1988年より導入された二人っ子政策により出生数が抑えられたこともあり、今後、急速に少子高齢化が進行すると予測されている。2017年時点でのベトナムの60歳以上の高齢者数は人口の11%(約1,060万人)であるが、2030年には17.5%(約1860万人)、2050年には28%(約3200万人)に達するとの見方もある(ERIA,2020)。

これを受けてベトナム政府は2017年より、各省庁の高齢化関連の課題の責任の明確化、高齢化対策の活動計画の策定を指示し、国民皆年金に向けた公的年金制度の改革や健康保険法の改正、定年年齢の引き上げや二人っ子政策の廃止の方針等様々な高齢化対策を打ち出している(JICA,2019)。

しかし、山崎ら(2018)が指摘する通り、高齢者の世話は家族がするもの、歳をとったら呆けるのは当たり前といった風潮も根強く、高齢者看護教育も教育機関ごとに差が大きいことも、来日したベトナム人が認知症の高齢者の支援に困難を感じることに影響を与えている。

そこで本研究では、ベトナムでの看護教育機関の教員と共同で、日本で働くベトナム人看護師や介護士を対象に認知症に関する認識調査を実施した。また、彼らが勤務する施設や病院の管理者がベトナム人医療者に期待することについて話を伺った。さらに日本の介護の教育機関に在籍するベトナム人に対しても認知症に関する認識調査を実施した。また、同教育機関の教職員に対して、ベトナム人学生に対する認知症教育に関しての面接調査を実施した。それらの調査結果をもとにベトナムの看護教育機関において、認知症に関する集中講義ならびに質問紙調査を実施した。

以上をふまえ、最終的には日本で働くベトナム人看護師や介護士の教育やベトナムにおける高齢者看護学教育について提言を行う。また、社会的文化的背景と認知症認識との関連について文化人類学的に考察する。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本で働くベトナム人看護師や介護士、ならびに日本の看護・介護に関する教育機関に在籍するベトナム人学生の認知症や認知症の高齢者に関する認識を明らかにすることである。

具体的には、日本で働くベトナム人看護師や介護士を対象に面接調査を実施し、彼らが認知症をどう認識しているのか、また認知症患者への関わりで何に困難を感じているのかを明らかにする。また、ベトナム人をはじめとする外国人を対象とした日本の看護・介護教育機関の学生ならびに教職員を対象に、学びの場において何に困難を感じているのかを面接調査する。また、その結果をふまえ、ベトナムの看護教育機関において、認知症に関する集中講義を実施する。

本研究の到達点として、社会的文化的背景との関連を踏まえた上で、日本で働くベトナム人看護師、介護士の教育や臨床支援の在り方、また、ベトナムにおける認知症を含む高齢者看護の教育方法を提言する。さらに、認知症をめぐる認識と社会文化的背景との関連について文化人類学的考察を行うことにより、日本とベトナムの両国において、既存のものとは異なる認知症の捉え方を提案する。このことは、認知症患者を新たな枠組みで捉えなおし、その価値を見出すことにつながり、多様性を持った社会の持続的発展に寄与すると考える。

## 3. 研究の方法

本研究では、ベトナム社会主義共和国ホーチミン市にあるファムゴックタック医科大学の教員と共同で、日本で働くベトナム人看護師や介護士ならびに介護学生および介護教育機関の教員(日本人)を対象に以下(調査1~5)の面接調査を実施した。また、面接調査の結果をもとにホーチミン市の看護教育機関の学生を対象に認知症の集中講義ならびに質問紙調査を実施した。調査1:日本の病院に勤務するベトナム人看護師の認知症および認知症高齢者に対する認識についての面接調査

調査 2: 日本の高齢者施設に勤務するベトナム人介護士の認知症および認知症高齢者に対する認識についての面接調査

調査 3: ベトナム人看護師の勤務する病院およびベトナム人介護士の勤務する施設の看護部長・施設長に対するベトナム人看護師やベトナム人介護士に対する認識についての面接調査

調査 4: 日本の介護福祉士養成施設に在籍するベトナム人学生の認知症および認知症高齢者に関する認識についての面接調査

調査 5: 日本の介護福祉士養成施設でベトナム人学生の指導経験のある教員の認知症教育に関する認識についての面接調査

さらに上記、研究結果を受けて 2024 年 3 月ベトナムの PNT 医科大学看護学部の看護学生 180 名ならびに看護教員 20 名を対象に認知症に関する特別講義ならびに質問紙調査を実施した。特別講義の内容は『1. 認知症概論 (磯部昌憲; 京都大学医学部附属病院精神科神経科特任講師)』『2. 認知症看護と倫理 (松葉祥一; 元神戸市看護大学看護学部教授)』『3. 認知症の看護 (甲村朋子; 東京医療保健大学和歌山看護学部)』の 3 つから構成され、それぞれ 50 分(英語 + 日本語ベトナム語通訳有)の講義ののち、グーグルフォームを用いて質問紙調査を実施した。

#### 4. 研究成果

##### <日本で認知症高齢者をケアする看護師・介護士への面接調査>

調査 1, 2, 4 については、以下にて半構成的面接をベトナム人研究者がベトナム語で実施した。なお、研究 3 及 5 の内容は研究結果を補足するために使用した。

##### 1) 質問内容

- (1) 来日の前後で高齢者のイメージは変化したか?
- (2) 来日の前後で認知症(認知症者)のイメージは変化したか?
- (3) 認知症の高齢者をケアする上で困ったことがあったか? 何が助けになったか?
- (4) 認知症高齢者の看護において学習しておいたほうが良いと思うことは何か?

##### 2) 結果

インタビューの内容は、ベトナム語で逐語録にし、日本語に翻訳後、質的記述的に分析した。結果、6 つのカテゴリーに分類された。

##### 【高齢者のイメージ】

- <日本の方が高齢者が多い> 「日本に来る前にインターネットで日本の高齢者や介護産業について調べてからきました。それでわかったのは、日本にはお年寄りがたくさんいるということ、出生率が低く、結婚する人も少なくなっているということでした。」
- <日本の高齢者の多くが働いている> 「日本の高齢者は歳をとっても活動的で働く人がたくさんいます。」
- <ベトナムの高齢者のほうが健康的> 「60 代でも歩くこともできず、車いすで食事も介助が必要な人もいます。そういう人をみるとベトナムの高齢者のほうが概して健康だと感じます。」

##### 【高齢者の介護される場】

- <日本の高齢者は病院や施設で介護される> 「日本に来る前に調べた結果、日本の高齢者もベトナムの高齢者も同じだと思っていましたが、日本に来て違いを感じました。ベトナムの高齢者は子どもや孫が彼らの世話をしてくれますが、日本はそうではありません。」
- <ベトナムの高齢者は自宅で介護される> 「ベトナムでは高齢者はほとんどが家族によって介護されますが、日本のケアの殆どは老人ホームや病院で行われます。」

##### 【日本の高齢者の孤独】

- 「ベトナムの高齢者は家族に愛情をもって世話されています。」
- 「日本の高齢者は人によるが、家族が恋しくて泣く人もいます。家族は様々。毎週、面会に来る人もいるし、誰も来なくてケーキやお花だけを送ってくる人もいます。」
- 「実習で会った 1 人暮らしの高齢者で食事は『イビス』のお昼ごはんだけという人がいました。彼は、食べられないのではなく、一人だと食べたくないのだそうです。」

##### 【認知症に関する知識】

- 「日本に来る前は認知症は単なる記憶力の問題と思っていました。」
- 「今は認知症が高齢者の認知や行動に影響を与えることがわかっています。また、認知症にも様々な種類があること、脳のどの部分が障害されて、このような障害が起こるのかということもわかるようになりました。」

##### 【認知症高齢者に対する意識の変化】

- 「初めて仕事にいったとき、半分不安で半分は怖かったです。」
- 「最初は(認知症の高齢者に自分から)話しかける勇気がなかったのですが、仲良くなってからはすごくかわいがってくれて、先週も仕事(アルバイト)の際に会いに行ったら、私の(冷たい)手をさすって温めようとしてくれました。」
- 「(認知症の)高齢者と接するうちに徐々に彼らに対する同情心が芽生え、より大切に愛おしいと感じるようになりました。」
- 「自分のおじいちゃん、おばあちゃんだと思ってケアをしています。」

### 【認知症高齢者との関わりで助けとなったこと】

「私が日本語が上手ではないことも心配でした。実際、高齢者の使う言葉が昔の言葉のため、わからないこともありました。そんなときはスタッフが何をいいたいのか伝えてくれます。」

「ほとんどの高齢者が思ったよりも弱っていて、皮膚も傷つきやすく、自分でケアができるのか不安でした。学校でやったのと実際にやるのでは違いすぎて、全然できませんでした。もちろん、スタッフは教えてくれるのですが...」

「最初はびっくりして何もできませんでした。ですが、スタッフの方から「あの人はこうだから、この人はこうだから、気にせず、落ち着いてやってみてください」と言われ、徐々にになれることができました。今では恐怖や不安はありません。」

### 3) 考察

上記の結果より、認知症高齢者に対する認識は変化しており、その変化は認知症高齢者と出会い、彼らの不可解な行動を『認知症』という疾患として理解する過程で生じていると考えられた。また、日本では『認知症』は「自分がなりたくないもの」(田中ら, 2022)という言葉に表されるように自身の延長線上に存在する病気だが、ベトナムでは、『認知症』という疾患は自分とは切り離された誰かがなる病気だと認識されていることが推察された。この背景には、ベトナムでは高齢者の割合が少なく、若年層の多い社会であるため、日本ほど認知症が一般的ではないことが考えられる。また、ベトナム人看護師・介護士の多くが認知症高齢者の寂しさや孤独に着目しているが、これはベトナムでは介護は家族が自宅で行うものという前提があると考えられる。日本の看護学生を対象とした調査(田中ら, 2022)では認知症の高齢者に対するイメージのなかに「家族が迷惑」「介護が大変」という項目が出てくることと対照的である。しかし、今後、ベトナムの社会構造の変化(都市化・核家族化・高齢化)に伴い、認識が変化する可能性がある。

また、ベトナム人介護学生が最初「怖い・恐怖・不安」を感じていた認知症高齢者への印象が「優しい・同情する・愛おしい」へと変化した背景には、机上の学習だけでなく、実習先やアルバイト先での体験、またその際のスタッフからの支援が大きく影響していると考えられた。さらにベトナム人看護師・介護士と協働で認知症高齢者を支援するにあたり、「知識」と「基本的な対応力」については、日本人(の医療関係者)が想像する認知症患者と彼らの考える認知症患者とのズレを少なくしていく必要があると考える。「忍耐力」についても認知症高齢者に対する理解を深めていく必要があることに加え、マッチングにおいてもポイントとなることが示唆された。

外国人が介護の担い手となる施設は、今後も増加傾向だが、施設の状況(介護レベル・スタッフの習熟度・待遇等)によっては、誤った認知症に関する知識や技術を習得する可能性がある(高齢者虐待や倫理的態度等も含む)。介護が対人援助職であり、かつスタッフと協働する職業である以上、一定の「日本語力」は必要であると考えられる。ベトナム人介護学生を含め外国人労働者やその労働環境に合わせたストレス・マネジメントに関する支援を実施していく必要性が感じられた。

### < 認知症の特別講義と質問紙調査 >

#### 1) 質問紙回収数(回収率)

153 / 200 (回収率: 76.5%)

#### 2) 回答者年代

10代: 2人 20代: 137人 30代: 4人 40代: 3人 50代: 5人 60代以上: 2人

#### 3) 学年

1年生: 3人 2年生: 77人 3年生: 28人 4年生: 28人

大学院生: 3人 教員: 8人 その他: 6人

#### 4) 結果

講義内容は「興味深かったか」との問いには、3講義のいずれも「大変興味深かった」「興味深かった」のいずれかの回答であった。

『認知症概論』の講義については、特に興味深い内容として、認知症の診断基準・病態生理、認知症に対する薬物療法、認知症のタイプがあげられた。また、『認知症看護と倫理』については、認知症者の行動コントロール、認知症者の意思決定とジレンマ、パーソンセンタードケアがあげられた。また、『認知症患者の看護』では、認知症の症状(徘徊)、認知症の症状(脱抑制)、認知症の症状(異食・嚥下障害)があげられた。いずれの場合もより具体的な知識や技術(対応方法)等により深い興味を抱いていることが伺える。また、さらに学びたい内容としては「認知症の予防方法」「認知症の正確な診断方法について」「病気の進行速度や影響を与える因子(アルコール等)」「地域の人々の認知症についての知識」等より専門的な知識や疫学的なデータ、地域支援の在り方等、幅広い分野に興味があることが明らかとなった。また、今後ベトナムでの認知症に関する問題としては、医療者また一般の人々の認知症に関連する知識不足や対応の困難さ、それに付随して社会福祉の貧困さ(施設等がほとんどないこと)等の医療現場だけでなく、社会全体で認知症に対応する困難さが出現すると予測していた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 三浦藍
2. 発表標題 ベトナムと日本の看護大学生の認知症に関する認識調査の報告
3. 学会等名 ベトナムのケア研究会（合同科学研究会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	甲村 朋子  (Komura Tomoko)  (70342136)	東京医療保健大学・看護学部・准教授   (32809)	
研究分担者	瀧尻 明子  (Takijiri Haruko)  (70382249)	島根大学・学術研究院医学・看護学系・講師   (15201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------